

当キャンペーンにより支援する活動のご紹介

～地域開発、アドボカシー、啓発活動、青少年育成など～

Pick Up！ 飢餓のない“地域をつくる”ー地域開発ー

栄養改善、教育、保健衛生、収入創出、ジェンダー平等、環境の 6 分野で包括的な事業を実施しています。

バングラデシュの事業例……■持続可能な生活センター運営／弱い立場の女性 805 名を対象にした栄養改善



持続可能な生活センターで、住民たちに有機たい肥の作り方をデモンストレーションしながら教える



事業の推進役たちが、専門家の研修を受講。「自分たちの住む地域を良くしたい」という意欲にあふれ熱心に学んだ

ー農業による食料の確保と収入創出を図るとともに、最も弱い立場の女性を対象にした栄養改善事業を開始ー

活動地のボダ郡とカリガンジ郡で、生活改善センターを運営しています。住民の大半が小規模農家であるため、生活改善センターを拠点に、専門家を招いて食料となる作物の生産性の向上や、農業による収入向上をめざす研修を行っています。そして、有機たい肥づくりや植物由来の防虫剤づくりなど、コストがかからず環境にもやさしい持続可能な農業を住民に広めています。

また、政府の貧困リストや住民からの聞き取りで、活動地のなかでも特に弱い立場にある女性を特定。805 名を対象に、栄養の大切さ、バランスの取れた食事、健康的な調理方法、女性の健康と栄養、家庭と社会で果たす女性の役割などについて伝える活動を始めました。活動を担うのは、住民から選ばれた事業の推進役 28 名で、研修を実施し、イラスト教材などを使って、効果的に伝えられるようにしました。事業の推進役は、毎月 2 回ずつ、各村で事業の対象の女性たちに、知識を伝えるとともに、各家庭を訪問して実践を促し、相談にも乗るなど、きめ細かく活動しています。

ベナンの事業例……■子どもの栄養改善／青少年・成人対象の識字教育



栄養たっぷりのおかゆは、地元でとれる素材を使い、消化吸収のよい形で調理されている



識字教育で使用する教材について教員らと議論。改善を重ねてわかりやすい内容にする

ー子どもの栄養改善をめざし、親にも必要な教育を実施ー

ベナンの活動地では 3 歳未満の栄養不良児が多いことから、対象の子どもたちに、週 3 回、栄養たっぷりのおかゆを提供しています。また、母親に栄養バランスのよいメニューと消化吸収のよい調理法を教え、家庭での実践を促しています。2018 年度は栄養不良児 155 名のうち、64% にあたる 99 名が回復しました。

また、母親の識字率と子どもの死亡率には明らかな相関関係があることがわかっています（世界銀行データ）。ベナンでは成人の識字率が約 3 割と特に低いため、青少年・成人対象の識字教育を行なっています。その際、読み書き・計算を学ぶのと同時に、栄養や健康、衛生についても知識が得られるプログラムを導入しています。定期的に教材を見直し、住民に確実に生活に必要な知識とスキルが身につくようにしています。識字能力や栄養についての知識が得られれば、今後収入が増え、生活の改善と、栄養状態の改善につながることを期待できます。

※回収キャンペーンの資金は、事業を行うために必要な調査・評価活動、農業研修、栄養改善事業や識字教育事業の運営費用として活用させていただきます。この他、住民の自立に必要な協同組合支援や幼稚園・母子保健センター運営や運営費の一部にもあてさせていただきます。

ブルキナファソの事業例……■貧困家庭の食料と栄養の安全保障／乳幼児と妊産婦対象の栄養改善



農業研修を実施。栄養価が高く育てやすい野菜について、住民たちに説明をする



保健センターでの栄養改善事業では、おかゆを提供するとともに、母親に消化吸収のよい栄養価の高い食事について伝えた

ー農業研修により、食料確保と収入創出をめざすー

ブルキナファソの活動地では、86%が農業に携わっていますが、その多くが収入が不十分で、生計を立てていくのが厳しい状態です。そこで、特に貧しい家庭を対象に、農業研修を実施。栄養価が高く収穫量の多い野菜の育て方や、土壌を改良する肥料づくりなどを教えています。肥料は、わらや牛糞などの手に入りやすくコストをかけずに作れ、環境にもやさしいものを教えています。生産量が上がれば、自宅で消費できる食料が増え、余剰作物を販売し、収入を増やすことも期待できます。

また、2005 年から公立の保健センターで行ってきた栄養改善事業（CREN）は、2018 年までの 13 年間で管轄の 13 カ村 2219 名の子どもを支援し、1619 名が栄養不良から回復しました。事業を行うなかで保健センターに本来行政として果たすべき役割を果たすしくみが強化されたこと、ハンガー・フリー・ワールド（HFW）の活動地 4 カ村に限れば栄養不良がほとんどいなくなったことから、2019 年度から行政に運営を委ねることになりました。今後は、HFW は妊産婦対象の母親教室を実施し、治療が必要な妊産婦がいれば母子保健センターを紹介するという、住民と行政の橋渡しをしていきます。

ウガンダの事業例……■協同組合支援／若者の農業研修



組合運営について貪欲に学ぶ住民たち。貯蓄や貸付など会計面で質問が集中した



肥料を扱う方法を専門家にデモンストレーションしてもらいながら教わる若者たち

ー住民の協同組合の能力強化、若者の就農支援ー

ウガンダの活動地では住民たちが助け合って地域を発展させ、生活を改善できるよう、2013 年度に4地域で協同組合を結成し、活動を支援しています。そして、各協同組合を通じて、住民の食料摂取と栄養の改善をめざす事業を継続しています。2018 年度は、4つの組合幹部役員 100 名を対象に、運営のためのリーダーシップと組織運営の研修を実施しました。また、総会を開催して事業計画や会計も承認。住民たちは、事業を実施し、HFW の支援を離れて自主運営できることをめざして活動しています。

また、ウガンダでは若者の人口比率が高いものの、農業で生計を立てていくことが難しいことから、農業離れが進み、若者の失業率の高さにつながっています。そこで、HFW の青少年組織ユース・エンディング・ハンガー（YEH）のメンバー90 名を対象に、農業研修を実施しました。農業博士を講師に依頼し、博士の農園を見学しながら、穀物や野菜、果物などの作物栽培と、豚、牛、ヤギ、鶏など家畜飼育方法を学びました。それぞれの家庭で取り入れることができれば、農業による収入の向上が望めます。若者の就農を促し、地域の食料確保と栄養の改善につながっていきます。

※回収キャンペーンの資金は、栄養改善事業、学校給食事業、モデル農園運営などの各事業に活用させていただきます。この他、住民の自立に必要な協同組合支援や、こうした支援を行うために調査・評価活動、各種研修や運営費の一部にもあてさせていただきます。

Pick Up ! 飢餓を生み出す“しくみを変える” —アドボカシー—

政府や国際機関に対し、飢餓の終わりに効果的な政策などを提言し、飢餓を生み出す社会構造を変えていくことをめざしています。



大学での署名活動。青少年組織 YEH メンバーを中心に全国で署名活動を行った

バングラデシュ

全国民に食料を保障する法案が制定され、それに基づく実際的な政策がとられることを求める署名キャンペーンを、若者が中心になって集めました。WEB サイトに署名キャンペーンページを制作するとともに、全国の大学などで説明会したあと署名をしてもらい、1 年間で目標の 10 万を上回る 12 万名を超える署名を集めることができました。集めた署名は議員に提出。実際の法律に反映されることが期待できます。

ブルキナファソ

ブルキナファソでは全国に食料備蓄庫があり、食料の少なくなる時期に、貧しい人々に安く販売できるようになっているはずでした。ところが実際には、食料庫に食料が入っていないかったり、裕福な人が買ってしまっていたり、と本来の機能を果たしていませんでした。そこで、HFW が地方自治体に何度も申し入れた結果、担当者が更迭されて体制が一新。備蓄庫には食料が保存され、家庭での備蓄が切れる時期に購入できるようになりました。1 日に 1 食しか食べられないという事態も避けることができるようになりました。備蓄庫の整備は、活動地以外の地域の人々にもこの恩恵が及びます。



食料備蓄庫から安く購入した食料を選び出す住民。HFW はグループ購入も提案し、小分けして必要な分だけ少額で買えるようになった

Pick Up ! 「飢餓なくす人」が増えるよう“気づきをつくる” —啓発活動—

海外の活動国では、誰もが「食料への権利」を持っていることを伝え、実現のために行動することを訴えています。日本でも、飢餓や世界の食料問題について伝える人を増やし、解決のために行動するよう働きかけています。



事前に HFW と打ち合わせをした住民有志メンバーが、歌や踊りを披露

ウガンダ

住民たちに「食料への権利」について伝え、その実現のために行動することを呼びかける啓発集会を開催しています。より住民の関心を集め、理解が深まるよう、歌や踊り、寸劇による啓発集会を開催。内容を工夫したことで、狙い通り通常よりも多くの住民が集まり、楽しみながら HFW のメッセージを理解することができました。他地域でも同様の集会を開催し、理解を広めていく予定です。

日本



多様な立場の登壇者からは、飢餓の解決につながる取り組みなどが発表された

学校で講演やワークショップを行うとともに、イベント開催や出展、事務所訪問受け入れなどの機会に、世界の飢餓の現状と HFW の活動について伝え、解決のための行動することを呼びかけています。HFW が事務局を務める「世界食料デー」月間 2018 では多くのイベントを開催。11 月に、横浜市との共催でシンポジウムでは 362 名の参加者があり、私たちの「食」と SDGs についてともに考える機会を持ちました。アンケートで、参加者のうち 106 名が「飢餓の解決のために行動したい」と答えました。

※回収キャンペーンの資金は、こうした各国でのアドボカシー、啓発活動、イベント開催の費用として活用させていただきます。この他、活動を行うために必要な調査・評価活動、各種研修や運営費の一部にもあてさせていただきます。

Pick Up！ 飢餓をなくす“若い力を育てる” ―青少年育成―

未来の担い手となる若者が持っている力を存分に発揮し、自ら飢餓を終わらせることができるように、ハンガー・フリー・ワールドは、世界5カ国で活動する青少年組織ユース・エンディング・ハンガー（YEH）を通じて若者の活動をサポートしています。



優秀作品を選んで賞を授与。生徒たちは真剣に取り組んだ

ベナン

すべての人が生まれながらに持つ「食料への権利」について、子どもたちに知ってもらおうと、YEH が中高一貫校でイラストコンテストを開催。食べる喜びや楽しさ、そして食べ物を大切にすることなどを生徒たちは思い思いにイラストに描きました。自分たちと年齢の近い YEH たちの説明を聞き、手を動かすなかで、「食料への権利」への理解が深まりました。

日本

茨城、東京、山梨、愛知で活動する YEH グループが、ワークショップやゲームなど内容を工夫したイベントで、飢餓をなくすために行動することを呼びかけました。また、8月に実施したファシリテーション研修で学んだ大学生や高校生が、学校などで飢餓や食料問題について伝え、行動を起こすことを呼びかけました。その参加者が、さらに身近な人たちに伝える波及効果も生まれました。



ワークショップを開催する YEH 東京メンバー。メッセージカードを使い、身近な食から、世界の飢餓について考えてもらった

※回収キャンペーンの資金は、こうした YEH による開発事業や啓発活動の費用に活用させていただきます。この他、青少年の活動をサポートするために必要な調査・評価活動、各種研修や運営費の一部にもあてさせていただきます。

活動をより効果的に ―組織運営―

限られた資金と労力で最大の効果が得られるように、組織運営にも注力しています。支部の運営体制の強化をしながら、本部の管理部門の改善をしました。また、2018 年度は、2016-2020 年の中期目標の中間評価を実施。「地域開発」「アドボカシー」「啓発活動」「青少年育成」の 4 つの活動は順調ながら、組織運営の課題があきらかになりました。今後は重点課題に注力していきます。

日本の本部では、専門技術を備えたボランティアやインターンが活躍しました。イベント運営や「書損じハガキ回収キャンペーン」、広報等にも多くのボランティアが参加し、質の高い活動を推進する力になっています。

職員は他者評価と自己診断プログラムを受け、さらに能力を強化するための研修を受講しています。



支部の会計能力強化のために、会計担当者を招へいして研修を実施した



事務所に届く書損じハガキ等の仕分けとカウントには、個人・企業など多くのボランティアが活躍



「職場をよくする会」で組織の課題を洗い出し、どう解決したらいいか話し合った

※回収キャンペーンの資金は、こうした能力強化のための研修費や会議の開催費など、運営費の一部にもあてさせていただきます。